山海塾作品

『卵を立てることから—卵熱』研究
—「擬死再生」のモチーフを中心に

お茶の水女子大学大学院　塩田靖子

Ⅰ．研究目的

本研究では，1975年に天児牛大（1949－）を中心として創立された男性舞踏グループである山海塾の作品『卵を立てることから—卵熱』（1986年・パリ市立劇場／フランス）（以下『卵熱』）において，修験道の入峰修行の「擬死再生」のモチーフを中心とした考察を行い，作品の特徴を導き出すことを目的とする。

Ⅱ．研究方法

本研究は，『卵熱』に関する新聞・雑誌記事の批評文59件，天児牛大のインタビュー記事34件を中心とした文献研究を行う。

批評文を基に『卵熱』における「擬死再生」のモチーフを明らかにし，入峰修行のそれとの類似性を検証する。そして，「擬死再生」のモチーフにおける『卵熱』の全体的な考察を行う。

Ⅲ．考察結果

（1）「擬死再生」のモチーフにおける入峰修行と『卵を立てることから—卵熱』の類似点

「擬死再生」のモチーフである「死」「受胎」「成長」「誕生」における入峰修行と『卵熱』の類似点は以下の３つである。

①‘モノ’による意識の変化を利用することで，「擬死再生」のモチーフを進行させている。特に類似しているのは，「死」の部分である。入峰修行では死装束の一部を身につけて山に入る，『卵熱』では白塗りをして舞台に上がる。このように，‘白色’を身につけることによって，日常からの変化を意識させていると考えられる。

②「成長」において，母胎内における人間の成長を扱い，それが「擬死再生」のモチーフ全体の中心的な役割を担っている。入峰修行の中心となる‘十界修行’は，それぞれの修行が母胎内で次第に成長して仏となっていく段階を示しているといわれる。『卵熱』では，水を張った舞台で，人が寝ている状態から立てるようになるまでの過程についての表現がみられる。

③「擬死再生」が行われる空間において，日常空間から非日常空間へ移行し，また日常空間に戻る。入峰修行では，山を一度死んでから入る非日常空間として捉えている。『卵熱』では，舞台美術等によってつくられた舞台を非日常空間として捉えていると考えられる。

また，そのような非日常空間には，垂直の方向性が読み取れる。入峰修行では，山岳は天地合体の場所として捉えたり，本堂にひもを吊るすことで天地合体を示すといわれる。『卵熱』では，舞台において，上方から水と砂の滝が常に落ち続け，それは重力の視覚化と捉えられている。

（2）「擬死再生」のモチーフで貫かれた作品『卵を立てることから—卵熱』

「擬死再生」のモチーフは，『卵熱』において次のようにあらわれている。

舞台に上がる前，白塗りをする（死）。作品の始めに天児が登場する。天児が笛を吹き終わると同時に，4人の舞踏手達が舞台に登場し，やがて水を張った舞台に入って卵の形のようにうずくまる（受胎）。次に，天児が舞台美術である卵のオブジェと踊り，吊られた卵を振り子のように動かすことで，うずくまっていた４人の舞踏手達は動き出し，徐々に倒れては立つ動作を繰り返し始め，最後に立つことを獲得する（成長）。そして，天児が卵を持ち上げ，水の滝に当てることで卵が割れる。それと同時に４人の舞踏手達が舞台に飛び出すように登場し，水を飛び散らせながら動き回る（誕生）。その後，天児は砂の滝の中に埋もれ，４人の舞踏手達は舞台を退場する。

『卵熱』における「擬死再生」のモチーフは，４人の群舞を中心に展開され，それを補う形で天児のソロが４人の群舞の間に挿入されている。そして特に，4人の群舞と比較すると，天児のソロの方が舞台美術を多用しており，4人の群舞を天児が舞台美術によって補い，進行させていると考えられる。（以上　図１参照）

以上により，山海塾作品『卵を立てることから—卵熱』は「擬死再生」のモチーフを持つ作品であると考察される。即ち，天児が山海塾作品で一貫してテーマとしている「誕生＝死＝再生」は，『卵熱』においては「擬死再生」という形であらわれていると考えられる。
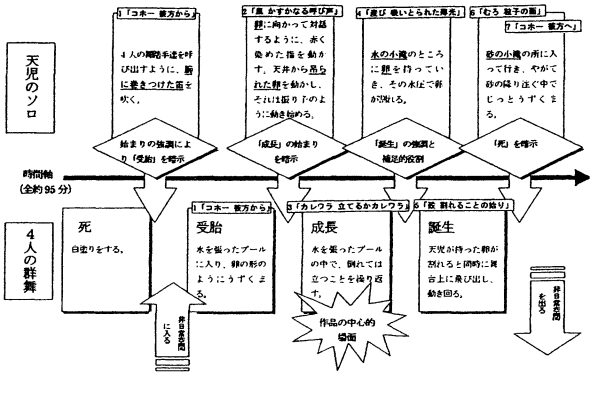
図１：『卵熱』における「擬死再生」